『11階の窓』

中村慎一

行くぞ、全国大会！ 水産クラブの甲子園!!

～安心して下さい、私たちも考えてますよ！～

11月1日、第45回北海道高等学校水産クラブ研究発表大会が、今年の当番校厚岸翔洋高校（山本十三校長）において開催された。出場した小樽水産高校、函館水産高校、厚岸翔洋高校、天売高校の4校、11チーム28名の高校生による熱い発表がステージの上で繰り広げられた。

この大会は、北海道高等学校水産クラブ連盟が主催し、公益財団法人北水協会の他、北海道高等学校長協会水産部会、北海道産業教育振興会が後援している。

本道の水産教育は、かつては、浦河高校や網走向陽高校など地域に水産科を置く高校があったが、子供や志願者の減少などにより、令和5年には、全道278高校のうち、水産高校は、小樽、函館水産高校、厚岸翔洋高校のわずか3校、生徒数も専攻科を入れ757人となっている。一方で、今回参加の天売高校は、普通高校であるが、水産加工などの水産実習にも取り組み、地域の自然や水産業をテーマにした特色ある授業も行われている。天売高校の水産クラブは、平成19年からこの大会に参加している常連校だ。

▲北海道高等学校長協会水産部会 亀山喜明小樽水産高校長

また、会場となった厚岸翔洋高校は、当番校として、長谷川智人教頭先生をはじめ先生らの指導のもと、生徒みずから会場設営や発表機材の準備、司会、スケジュール管理など、前日のプレ大会から大会の運営にあたってくれた。

さて、北海道では地球温暖化の影響によって、今まで馴染みのなかった魚が獲れ、一方で、シロザケ、スルメイカ、コンブなど特産の魚介類の不漁が続いている。また、他方で、少子高齢化によって、水産業の担い手が減少し、この他にも、消費者の魚離れや藻場の減少などなど、様々な課題が山積しているのは、本道の水産関係者すべてが承知しているところだ。

このような中、水産クラブの発表内容は、日々の授業や研究活動を通じ、水産海洋における課題を見つけ、これを体験的、探索的な視点で、高校生らしい発想で調査、研究をするものだが、今回の発表内容はいずれも、厳しい水産業の現状を考えた優れた内容だった。

審査の結果、上位チームから優秀賞、優良賞、努力賞に、次のチームが選ばれた。

努力賞から紹介するが、函館水産高校水産食品科『未利用魚の利用～魚食の普及を目指して～』、これは、ゴッコやカジカ類を利用したピロシキを製作し、地元企業とのコラボレーションを企画したものが選ばれ、同じく努力賞の小樽水産高校水産食品科の『漁師メシの再現をめざして～ニシンdeパスタシリーズの開発　第2報～』は低未利用となっているニシンの白子（精巣）に注目した商品開発を行い、生協トドックでの商品化を目指したものだ。

また、優良賞の函館水産高校品質管理流通科の『急速に進む「魚離れ」をニシンの「江差揚げ」が解決！』は、消費者が魚食を敬遠する原因のトリメチルアミンや鱗（うろこ）に注目したニシンの揚げ物を開発した研究として、厚岸翔洋高校の『スマート水産業への取り組み～翔洋生の挑戦、持続可能な漁業の存続のために』は、地元漁業者の声を聞き、カキ養殖業におけるカキの成熟予報を行った研究が選ばれた。

▲小樽水産高校木村君・並木君の発表

栄えある優秀賞には、小樽水産高栽培漁業科3年の田中柊介君、並木省吾君による『小樽のニホンザリガニを調べてみた』が見事選ばれた。この研究は、高校周辺での絶滅危惧種ニホンザリガニの生息の消長を考察したものだが、海に流れ入る沢や小川の生物多様性や環境を保全することが、毎年ニシンの群来が見られる豊かな小樽の浜づくりにもつながる内容になっている。優秀賞の研究は12月12・13の両日、愛知県三谷水産高校で開催される全国大会で発表される。水産クラブの甲子園、全国大会での活躍が期待される。

▲優秀賞・優勝旗の授与

僅差で賞にはもれてしまったが、厚岸翔洋高校の『厚岸の未利用魚・低利用魚の活用～アメマスの活用方法についての研究～』は、アメマスを原料に揚げ蒲鉾「あめかま」を製作し、これがふるさと納税の返礼品に採用されたり、天売高校の『天売で獲れる未利用魚の活用法～発展版～』では、いままでの先輩らの研究を発展し、イベントでの地産地消に加え、今後ネット販売を検討するなど、今まさに、提唱されている「海業」にもつながる研究だ。また、小樽水産高校の『SDGsな漁具の作成～ミズダコの漁獲を目指して～』では、漁業廃材を用いて「いさり」を製作しながらも海岸の漂流ゴミについて考える内容となっていたり、函館水産高校の『海藻等の廃棄物の有効利用』では、廃棄される海藻や貝殻を肥料として植物の栽培試験を行うなど、環境問題にも取り組んだものだ。函館水産高校のもう1チームは、ラジコンボートや衛星画像を用いたアマモ場の調査を行い、ブルーカーボンの推定も検討する『北斗市七重浜のアマモ調査』として発表した。小樽水産高校情報通信科の『新校舎』という発表は、電気・情報通信を学ぶ生徒が、バーチャルの世界に水産高校校舎を再現し、学校紹介などICTを活用する提案がされた。

以上が4校、11チームの発表内容だ。各校の水産クラブ顧問の先生らによるご指導の賜物であるが、発表タイトルからも分かるとおり、高校生も、自分たちの視点で、今の水産業をしっかりと勉強しているのである。

発表終了後、道教委高校教育課の星澤克幸指導主事は、「今日の発表は、地域への貢献やメッセージ性のある、いずれも力のある内容だった。複雑な海洋の変化など目まぐるしく世の中が変動し、将来を見通せない中、解決すべき課題を見つけ捉えている。この経験を先の道で生かし、進む道での活躍を期待する。」と生徒へのエールをこめ講評した。

『安心してください！私たちも、水産業の未来を、しっかり考えてますよ!!』なのである。

◆　◆

せっかくの機会なので、公益財団法人北水協会について誌面をお借りし紹介する。この協会は、明治18年に本道水産業の振興のため設立された団体で、今年で創立から140週年の節目を迎えた。財団は現在、道内の研究者に水産業に関する試験研究の助成を行っており、先日報道された、北海道エアシステム（HAC）の飛行機で赤潮の観測を行う北大の調査も、当協会が助成した研究成果を活用している。財団は、水産高校の前身である北海道庁立水産学校が明治38年に開設された際に校舎を提供するなどの援助を行っており、現在まで、本大会をはじめ、本道の水産教育の充実にも力を注いでいる。

文責　公益財団法人北水協会　監事　中村慎一
写真提供　厚岸翔洋高校